

17世紀フランスの^{メモワール}回想録

嶋 中 博 章

1. 出版物としてのメモワール

言語哲学者の野家啓一氏によれば、人間は本質的に「物語る動物」、ないし『『物語る欲望』に取り憑かれた動物』であるという¹。17世紀のフランスについて言えば、この「物語る欲望」は《Mémoires》という形で表現された。「メモワール」という語は、日本では一般に「回想録」あるいは「覚書」と訳されているが、ここではまず、17世紀のフランス人がこの言葉に与えた定義を確認しておきたい。1690年に刊行された『汎用辞典』の中で、フルチエールは次のように記す。

MÉMOIRES 複数形 歴史家の書物を言い、事件に関与した者、あるいは事件の目撃者だった者によって書かれ、彼らの人生や行為を含む。ラテン人が *commentaire* と呼んでいたものに相当²。

つまりメモワールとは、事件の当事者ないし目撃者によって書かれた歴史記述、あるいは、歴史上の事件と個人の人生が交錯する場から生まれた歴史記述ということができる。このような意味でメモワールという語を用いたのは、1552年に出版された『コミーヌ殿のメモワール』(*Mémoires de messiere Ph. de Commines [sic]*) が最初であるという。この著作を皮切りに、以後フランスでは『メモワール』と題された作品の出版が相次ぎ、とくに17世紀はメモワールが流行することになる。

では実際にメモワールと題された作品は、どのくらい出版されていたのだろうか。フランス国立図書館のウェブ・サイト上にある電子目録で³、タイトル欄に《mémoires》と打ち込み、一年毎に検索してみた。その結果、メモワールと呼ばれる文書は、17世紀の後半、とくにルイ14世の親政（1661－1715）以降、フランスの出版界に浸透したことが確認された。

まず、コミーヌの『メモワール』が出版された1552年からルイ14世の親政開始前年の1660年までの期間には、再刊や第二巻以降の分冊を含めて、104点のメモワールが刊行されている（年平均0.96点）。それに対し、ルイ14世の親政期最初の5年（1661－

1665)だけで31点が刊行された(年平均6.2点)。また、ルイ14世の死後、オルレアン公の摂政期(1715-1723)では、再刊も含めて52点が刊行され(年平均6.5点)、著者39名のうち28名(71.8%)がルイ14世時代の人物であった。

もちろん、ルイ14世時代に書かれたメモワールの全てが印刷・出版されたわけではない。その多くは手稿のまま個人の文庫や文書館で眠っていた。それらが印刷され、多くの人々の目に触れるには、「歴史の世紀」である19世紀を待たねばならなかった。19世紀前半、政治史の区分で言えばブルボン王政復古と七月王政の時期に、それらのメモワールは国民的歴史の構築という情熱に後押しされて、文書館の埃の中から抜け出し、活字となって広く国民の利用に供されるようになったのである。ピエール・ノラによれば、「過去の証言に基づいて、現在の国民的正当性を打ち立てる⁴」ことが刊行の目的だった。1820年に刊行が始まる、プチトとモンメルケが監修した『フランスの歴史に関するメモワール全集』全78巻と、1836年から刊行が開始されたミショーとブジュラの『新・フランスの歴史に関するメモワール選集』全32巻は、19世紀のメモワール刊行事業の金字塔である⁵。

ところが、19世紀の後半になると状況が変わる。メモワールの刊行は継続されるが、「実証主義史学」が浸透するにつれ、メモワールに対する読者の態度がより慎重に、あるいはより疑い深くなり、メモワールがもつ史料的价值に疑いの目が向けられるようになるのである。プルーストが『失われた時を求めて』(1913-1927)の中で語るヴィルパリジ夫人の『メモワール』の「魔術」、夫人のサロンを実際以上に魅力的なものとして読者に信じ込ませてしまうあの魔術こそ⁶、「科学的な」眼差しを身につけた実証主義的歴史家にメモワールから距離を取らせることになった理由のひとつである。かりにメモワールの作者に読者を幻惑する意図がないにしても、客観的で価値中立的な回想などあり得ないことは、今日では共通了解事項であろう⁷。それゆえ、メモワールが史料としてよりも、文学作品としての評価を得て、歴史家以上に文学研究者の関心を引いたとしても不思議はない。実際、メモワールに関する研究は、文学研究において重要なテーマを成してきた。

2. 「ジャンル」から「行為の文学」へ

文学研究におけるメモワール研究に先鞭をつけたのが、マルク・フュマロリの論文「散文ジャンルの交差点に立つ17世紀のメモワール」(1971)である⁸。そこで開陳された見解は、その後のメモワール研究でも踏襲され、分析の枠組みとして機能することになる。これまでの文学研究がメモワールの「ジャンル」としての特質の解明に力点を置いてきたのも、フュマロリ論文の問題設定と無縁ではあるまい。以下、フュマ

ロリ論文などを参考にしながら、文学研究におけるメモワールの特質について確認しておこう。

まず、メモワールの担い手は、貴族、それも政治の世界で重要な地位を占める有力貴族だと言われる。日曜歴史家フィリップ・アリエスの言葉を借りれば、「貴族の文学⁹」ということになる。それゆえメモワールは、アンシアン・レジーム期の貴族と国家（国王）の関係の変遷を反映していると考えられてきた。

貴族がメモワールを執筆するに至った背景については、まず、宮廷に買収されたプロの歴史家に対する不信感が指摘されている。17世紀、歴史家たちは修辞を駆使してもっぱら王の栄光を称えることを自らの任務としていた。現代の歴史家オレスト・レイナムは、彼らを評して、歴史記述の歴史における「落第生であり、凡庸な世代」だったと容赦がない¹⁰。そうした歴史家に代わって真実の保管者たらんとしたのが、メモワール作者ということになる。17世紀のメモワール作者の一人レ枢機卿は、その作品の冒頭、読者に対し次のように語りかける。

どうかお願いします、私の語りにほとんど技巧がなく、逆に混乱だらけなことに驚かないで下さい。語りを構成するさまざまな場面を語る際、物語の流れを幾度も中断しますが、それでもあなたに抱く尊敬の念が求める誠実さをもってしか何も話し致しません¹¹。

この文面は、メモワールの作者が「技巧」を捨てて、「誠実さ」だけを武器に真実を語ろうとしているかのような印象を与える。この点については、後でもう一度取り上げることになる。

メモワール執筆のもうひとつの動機として、貴族の王権に対する不満が指摘されている。フュマロリによれば、回想録（Les Mémoires）は「主人公の王権に対する負債と、王権の主人公に対する負債が厳密に計算される会計記録（un mémoire）¹²」、つまり、王への奉仕とそれに対する王の報酬の貸借対照表として機能していたのだという。もうひとつ、文学研究におけるメモワール理解でおさえておくべきは、この王権に対する不満の表れとしてのメモワールに起こった質的变化を重視している点である。17世紀半ば、ジャンセニズムの影響と、フロンドの乱後の貴族勢力に対する絶対王政の最終的勝利によって、メモワールは内省化したのだという。「もはや宮廷と争うことは問題とならず、神と真摯に対話することが問題となる¹³」。

ここでひとつだけ具体例を挙げておきたい。それは先に触れたレ枢機卿とその『メモワール』についてである。レ枢機卿はフロンドに際して自ら数多くの論争文書（い

わゆるマザリナード)を執筆し、宰相マザランやコンデ親王と争った。内乱の末期(1652)にマザランによって逮捕・投獄されるも2年後に脱獄・亡命し、その後マザランの死により帰国がかなう(1662)。そして帰国後の1660年代から70年代にかけて『メモワール』を構想・執筆したとされる。さて、そのレ枢機卿の伝記の中で、著者のシモーヌ・ベルチエールは、メモワール作者のレ枢機卿とパンフレ作者のレ枢機卿を切り離して描いている。フロンドの荒波の中で生きていたパンフレ作者のレは、「自分の行為を正当化しようと試みていた」。それに対し、領地に引退したメモワール作者のレは、自己の探究に没頭し、「自己の深層」に沈潜していったのだという¹⁴。フュマロリが提示したメモワールの内省化という図式がそのまま受け入れられているのがわかる。

ところが近年、こうした伝統的な理解に真っ向から対立する見解がだされるようになった。ミリアム・シンビディは2005年に公刊した博士論文の中で、レ枢機卿の『メモワール』をマザリナードの延長線上に位置づけ、その論争的側面を強調する。彼女によれば、「メモワール作者の文体は、論争文書作家のエクリチュールを再利用」したものであって、「小冊子の中でと全く同じように、弁明を継続」しているのだという¹⁵。つまり、レ枢機卿の『メモワール』は引退の文学などでは決してなく、現実世界に働きかける行為のテキストだということになる。

こうした見解は、「文学事象の歴史」に関心を寄せる歴史家たち、クリスチアン・ジュオー、ダイナ・リパール、ニコラ・シャピラの近著でも共有されている。『メモワール』の構想と執筆に充てられた時期、レ枢機卿は亡命生活が原因の財政難に悩まされ、その地位にふさわしい生活を維持するのが難しい状況にあった。それゆえ、レ枢機卿は「立派な貴族にとって厄介で輝きに欠ける現実を消し去る」ために、『メモワール』を執筆したのだという。レ枢機卿にとって『メモワール』の執筆は、「名声を保ち、自由と行為の能力を維持するための戦い」としての意味を有していたのである¹⁶。

これら近年の研究に共通しているのは、「ジャンル」という発想を解体し、メモワールを具体的な歴史的・社会的現実の中に置き直して捉えようとする視点である。つまり、メモワール一般について語ることを拒否し、多様性(多目的性)にこそ着目し、個々のメモワールを行為として捉え、その作用を探ろうというのだ。その際、記述内容の真偽は問題にならない。

3. メモワールのレクチュールとエクリチュール

他方、メモワールの受信者、つまり読者については、まだまだ解明すべき点が数多

く残されている。そもそもテキストの受容の問題は、メモワールに限らず、その痕跡の少なさゆえに、いつも難問として立ちふさがってきた。筆者も、17世紀にメモワールがどのように読まれていたのかという問題について考えあぐねていたのだが、ある日偶然、興味深い記述に出会った。それは、ルイ14世の治世に國務卿を務めた人物、ブリエンヌ伯ルイ＝アンリ・ド・ロメニーの『メモワール』で¹⁷、その中で著者は自分が読んだ18冊のメモワールについて言及し、そのひとつひとつに評言を残していたのである。限られた史料ではあるけれども、メモワール受容の貴重な証言として、以下その言葉に耳を傾けてみよう。

だが内容に入る前に、一点確認しておくべきことがある。それは、18点のメモワールの中に、『メモワール』とは題されていないものも3点含まれていることだ¹⁸。そもそも、コミーヌの『メモワール』も初版（1528）のときには『八番目のシャルル王の年代記』（*Chroniques du roy Charles huitiesme de ce nom*）というタイトルであったし、レ枢機卿の『メモワール』も、手稿の段階では『レ枢機卿の生涯』（*La Vie du cardinal de Rais [sic]*）と題されていた。ジュオーたちが注意を促していたことだが、『メモワール』というタイトルは、作者の意図とは関係なしに、出版の過程でつけられることも多かったのである¹⁹。

さて、ブリエンヌ伯の『メモワール』であるが、彼が最も高く評価するのは、すでに何度かふれたコミーヌの『メモワール』である。

全てのなかで最も重要な人物は、私の意見では、フィリップ・ド・コミーヌとブラントームである。コミーヌは当然のこととして、語り口の誠実さと省察の揺るぎなさによって、最も優れ、最も完璧なフランスの歴史家の名声を得た²⁰。

ブリエンヌ伯はフルチエールと同様、メモワール作者を歴史家と見なしている。17世紀において、メモワールと歴史記述は同義のものとして存在していたと考えてよいだろう。

この歴史愛好家のブリエンヌ伯が自らメモワールを執筆しようと思ったのは、ある一冊の『メモワール』との出会いがきっかけだった。

数日前から、王軍の将校であったポンチ氏の『メモワール』を読んでいる。この『メモワール』は、アンリ4世、ルイ13世、ルイ14世の治世下における統治と戦争に関するさまざまな出来事を扱い、著者の死後に、その友人たちの熱意によって出版された。〔……〕ここで率直に告白しなければならないが、ポンチ氏のこ

の不世出の『メモワール』が存在しなければ、私はこの『メモワール』を書こうなどとは思わなかっただろう²¹。

ここから、メモワールの読書が新たなメモワールの執筆を促していることが見て取れる。メモワールを媒介とした読者＝作者の共同体が存在していたとも言えよう。この読者＝作者の共同体を構成していたのは、伝統的な文学研究が言うところとは異なり、必ずしも貴族に限定されていなかったようである。

ロアン公の『メモワール』は、とっても率直で、アンリ4世の死から1626年までの間にフランスで起こったことを扱っているが、プリオロが私に話したところでは、彼が公の秘書だったときに、それを書いたそう²²だ。

どうもメモワールは事件の当事者の筆によるとは限らず、その秘書による代筆、つまりゴースト・ライターもあり得たようである。代筆も許容されていたのは、読者（少なくともブリエンヌ伯）が、メモワールに文章の完成度を要求していたためである。

国務卿の故ブリエンヌ伯、すなわち私の敬愛する父の『メモワール』について、何か言えるのであれば、そうしたいところだ。それは原本のまま、私の弟であるクータンス司教が所有している。父が亡くなる直前、一切手を加えないことを条件に、彼に委ねたのである。そこには他所では見られない興味深い事実がたくさん含まれている。もし一カ月か二カ月手元に置けるなら、そこに欠けている最良の形式を与えるのだが。語法はあまり正確ではないし、関係のないことやつながりのないことがいっしょくたに詰め込まれ、解きほぐされていないため、この作品はまさしく混沌としている。こんなことになってしまった理由は、今は亡き私の父がメモワールを書くにあたって記憶だけに頼り、彼の手を通った事件を思い出すままに書きつけたからである²³。

メモワールは過去の出来事の生の証言ではない。推敲を経て生み出された「作品」なのである。先に引用したレ枢機卿の『メモワール』では、「技巧」を捨て、「誠実さ」だけを頼りに執筆したと語られていたが、メモワール作者にとって、誠実さと並んで、いやそれ以上に、文学的技巧は不可欠の要素だったのである。かく言うレ枢機卿の『メモワール』も、実際は文学として高い評価を受け、19世紀に「フランスの大作家」

叢書に加えられている。17世紀の人々にとって、文学的技巧は、歴史記述と矛盾するものではなかったのである。

4. おわりに

以上の論議をふまえて、17世紀におけるメモワールとは何かについて、改めてまとめておきたい。第一に、メモワールとは巧みな文体を備えた歴史記述である。ただし、その作者は専門の歴史家ではなく、かつ貴族に限定されるものでもない。貴族とその周辺に集う幅広い識字層がメモワール作成に参与していた。第二に、メモワールの記述および出版の背後には、「行為」^{アクション}する主体が存在する。個々のメモワールはそれら行為者の行為の一部を成し、それぞれの政治的・社会的文脈の中で、固有の「作用」^{アクション}を引き起こす。それゆえ、一種の政治的・社会的行為として、歴史が書かれていたと考えることもできる。メモワールは隠退した書斎人による歴史的省察の書ではない。メモワール研究の向こうには、歴史記述を介した（政治的・社会的）行為という領野が広がっているのである。

〈註〉

- 1 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫、2005年、16頁、18頁。
- 2 Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*, 3 tomes, La Haye et Rotterdam, 1690, réimp. Genève, 1970.
- 3 http://catalogue.bnf.fr/jsp/recherchemots_avancee.jsp?nouvelleRecherche=O&host=catalogue
- 4 Pierre Nora, « Les Mémoires d'État. De Commynes à de Gaulle », dans Pierre Nora (dir.), *Les lieux de mémoire*, II, La Nation, Paris, 1986, p.30.
- 5 Claude-Bernard Petitot et Jean-Louis Monmerqué (éd.), *Collection complète des Mémoires relatifs à l'histoire de France*, 1820-1829, 78 vols.; Jean-François Michaud et Jean-Joseph Poujoulat, *Nouvelle Collection des Mémoires relatifs à l'histoire de France*, 1836-1839, 32 vols..
- 6 マルセル・ブルースト（鈴木道彦訳）『失われた時を求めて 5 第三篇 ゲルマントの方 I』集英社文庫、2006年、389－390頁。
- 7 この点については、西川長夫氏が「68年革命」時代を回想し、その世界史的意義を分析した著書の中で率直に述べられている。西川長夫『パリ五月革命私論 転換点としての68年』平凡社新書、2011年、14頁。
- 8 Marc Fumaroli, « Les Mémoires du XVII^e siècle au carrefour des genres en prose », *XVII^e siècle*, n° 94-95, 1971, pp.7-37.
- 9 Philippe Ariès, « Pourquoi écrit-on des Mémoires? », dans *Les valeurs chez mémorialistes français du XVII^e siècle avant la Fronde*, Colloque organisé par le centre de philologie et de

- littérature romanes de l'université des sciences humaines de Strasbourg et le centre « littérature et spiritualité » de la faculté des lettres de l'université de Metz sous le patronage de la Société d'Étude du XVII^e siècle (Strasbourg et Metz, 18-20 mai 1978), Actes publiés par Néomi Hepp et Jacques Hennequin, Paris, 1978, p.18.
- 10 Orest Ranum, *Artisans of Glory. Writers and Historical Thought in Seventeenth-Century France*, Chapel Hill, 1980, p.338.
 - 11 Jean-François-Paul de Gondî, Cardinal de Retz, *Mémoires*, dans *Œuvres*, édition établie par Marie-Thérèse Hipp et Michel Pernot, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, 1984, p.127.
 - 12 Fumaroli, *op. cit.*, p.15.
 - 13 *Ibid.*, p.29.
 - 14 Simone Bertièrre, *La vie du Cardinal de Retz*, Fallois, Paris, 1990, pp.553-554.
 - 15 Myriam Tsimbidy, *Le cardinal de Retz polémiste*, Saint-Etienne, 2005, pp.466-467.
 - 16 Christian Jouhaud, Dinah Ribard et Nicolas Schapira, *Histoire, Littérature, Témoignage. Écrire les malheurs du temps*, Paris, 2009, pp.75-76.
 - 17 Louis-Henri de Loménie, comte de Brienne, *Mémoires de Louis-Henri de Loménie, comte de Brienne dit le jeune Brienne*, tome 1er, Paris, 1916.
 - 18 その3点は以下の通り。Fontrailles, *Relation des choses particulières de la Cour pendant la faveur de M. le Grand*; Bussy-Rabutin, *Amours des Gaules (Histoire amoureuse des Gaules)*; Joinville, *L'histoire et chronique du treschrestien roy S. Loys, IX. du nom*.
 - 19 Jouhaud, Ribard et Schapira, *op. cit.*, p.23.
 - 20 Brienne, *op. cit.*, pp.25-26.
 - 21 *Ibid.*, pp.1-6.
 - 22 *Ibid.*, p.48.
 - 23 *Ibid.*, pp.52-53.